

弘前大学 HIROSAKI はやぶさカレッジ 8 期生の 短期留学生との交流プログラムへの参加による学び

— Hirosaki University Summer Program 2021
(短期オンライン日本留学プログラム) 内日本語教材作成への参加と
タンデムラーニングを通してはやぶさ生は何を学んだか—

Educating the Hirosaki University 8th Generation Hayabusa College Students Through Participation in an Exchange Program with International Students:

What Hayabusa Students Learned from Creating Japanese Teaching Materials
for Foreigners, Performing in Videos, and Tandem Learning

高 橋 千代枝

Chiyo Takahashi

弘前大学 国際連携本部

Department of International Education and Collaboration, Hirosaki University

Abstract

This paper examines what Japanese students learned by participating in the process of creating teaching material and through “Tandem learning” during the “Hirosaki University Summer program 2021”, a short-term program for international students. A questionnaire survey conducted with the students enrolled in this program indicated a change before and after participating in it confirming that they had acquired greater depth in cross cultural understanding, wider perspectives and an awareness of their own altered world view. We want to use the results of this research to promote further internationalization of Hirosaki University in the future.

Keywords: グローバルリーダーシップ, 留学生との協働, 大学の国際化

国際化が進む世界の中で、近年大学における「グローバルリーダー育成の取り組み」が注目されている。¹日本では、2008年の「留学生10万人計画」に端を発し2020年にはほぼ達成された「留学生30万人計画」等のいわゆる「受け入れ」側に立った政府の国際化への取り組みが2010年頃から増えてきた。一方で、世界的なヒト、モノ、カネの移動の活発化や国際的な企業の人材獲得競争の激化に伴い、留学生、日本人学生を問わず、大学で「グローバル人材」を育成することが推奨されるようになってきた。²こ

¹ 文科省は2014年に「グローバル人材の育成」と「大学の国際競争力の強化」を目的とし（小林2014: 8）、国際的に活躍できる人材の育成を目指す「スーパーグローバル大学（Super Global University, SGU）支援事業」を開始し、現在までに筑波大学や北海道大学、東北大学等国内30の大学（平成26年度採択）で様々な事業が行われている。

² 政府の国際化促進に対する姿勢は2012年に官邸が発行した「グローバル人材育成戦略」にまとめられている。詳細については以下のウェブサイトを参照されたい。https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf（最終閲覧日2022年1月13日）

のような変化により、日本国内の大学でもSGU³を中心に日本の国際化を推進することを目的としたグローバル人材育成事業が行われるようになり、新たに学部や研究科を新設したり、⁴日本人学生と留学生が共に学ぶ「国際共修科目」を学内で実施したりするなど、様々な施策が行われるようになった。⁵

弘前大学でも、2013年から「弘前大学HIROSAKIはやぶさカレッジプログラム（以下「はやぶさカレッジ」）⁶」を開設し、日本人学生の国際化を推進する取り組みを行っている。「はやぶさカレッジ」は、全学部の1、2年生の希望者から選抜し、英語の特別学習と短期海外留学、グローバルリーダーシップを養うための学修の3つをカリキュラムの柱⁷とし、「世界的な視野で地域の問題への提言ができる学生」を育成する事業である。

この「はやぶさカレッジ」は2021年に8期生8名（後に1名辞退）（以下「はやぶさ生」）を迎えたが、コロナ禍によりカリキュラムの柱の一つである海外留学ができなくなってしまった。このことを受け、はやぶさ生に留学体験の代替となるような学修をさせるため、国際連携本部主催の海外提携大学所属留学生向け日本語・日本文化オンライン短期プログラムである「2021弘前大学サマープログラム（以下「サマープログラム」）」に、はやぶさ生を参加させることとなった。本稿では、はやぶさ生が留学生対象のサマープログラムに関わり、日本語教材作成と“Tandem learning”⁸に参加することにより、その過程で何を学んだかを、事後アンケートの結果から検証するものである。

サマープログラムへのはやぶさ生の参加

本節では、本学の海外提携校向けに提供した短期オンライン日本留学プログラムであるサマープログラムに、はやぶさ生がどのように参加したかを述べる。

序文で述べたように、コロナ禍により留学生の渡航が制限され、現在大学の留学事業は大きな影響を受けている。本学も、毎年行ってきた海外提携大学の交換留学生の受け入れと、在学生の海外派遣留学は中止を余儀なくされた。⁹「はやぶさカレッジ」はその修了要件に海外指定大学への短期留学を含むプログラムであるが、これもかなわない状態である。このような中で、海外への渡航ができないはやぶさ

³ SGU (Super Global University) とは、日本の国際化を推進する拠点として、グローバル人材育成に取り組む実践を行っている大学を支援する文科省の事業である。北海道・東北地方では、北海道大学と東北大学がSGUとして採択されている。詳細は文科省SGU事業ウェブサイト https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm を参照されたい。(最終閲覧日2022年1月13日)

⁴ 近年東洋大学 https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter/nl137_feature_03.html、麗澤大学 <https://www.reitaku-u.ac.jp/faculty/global/> 他多数の大学で「国際」に関係する学部や研究科が新設されている。(最終閲覧日2022年1月13日)

⁵ 日本人学生と留学生が共に学ぶ「国際共修」の授業の実践については、東北大学（佐藤他2011、末松2020）、神戸大学（黒田他2021）、関西大学（岩崎他2015）、新潟大学（足立2017）他多数の大学から報告されている。

⁶ 弘前大学HIROSAKIはやぶさカレッジ https://www.kokusai.hirosaki-u.ac.jp/studyabroad01/sa01_page9/（最終閲覧日2022年1月13日）

⁷ 弘前大学第8期HIROSAKIはやぶさカレッジ募集要項3ページ「1.カリキュラム(2)カリキュラム③留学に関する科目：短期海外研修【必修】」とある。以下のウェブサイト参照されたい。<http://www.kokusai.hirosaki-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/11/%E3%81%AF%E3%82%84%E3%81%B6%E3%81%95%E3%82%AB%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%B8%E7%AC%AC8%E6%9C%9F%E5%8B%9F%E9%9B%86%E8%A6%81%E9%A0%85.pdf>（最終閲覧日2022年1月13日）

⁸ “Tandem learning”とは、本学国際連携本部サワダ・ハンナ・ジョイ氏により発案された学習方法で、サワダ氏担当の授業内で以前から行われてきたものである。日本人学生と留学生が共に学び合い両者の国際化を促進することを目的とし、授業内外で両者が対話する機会を作り、様々なトピックについて語り合うことにより、両者に「気づき」や「学び」があることを意図している。“Tandem learning”の‘Tandem’は、‘Tandem bicycle’の‘Tandem’と同じ意味で、一台の自転車を2人でこぐことにより前に進むことをイメージして名付けられた。サマープログラムにおいて行ったTandem learningについては、「Tandem learning」とは」の節で詳細に述べる。

⁹ 海外提携大学からの交換留学生について、令和元年度を受け入れ数は106名であったのに対し、コロナ後令和2年度は35名（令和元年度後期から既に来日していた留学生）で、後期は受け入れを中止し、0名となった。本学から海外提携大学への留学の送り出しも、令和元年度は20名を派遣しているが、令和2年度は0名である。令和3年度は海外からの受け入れはオンラインで14名、こちらからの派遣留学生は1名となる予定である。（弘前大学国際連携本部調べ2022年1月14日現在）

生と、日本への渡航ができない日本留学を希望する外国人学生の双方に、「留学」の代替となるような体験をさせることができないかと考えられたのが、本取り組みである。

本取り組みの発案は、本学国際連携本部のサワダ・ハンナ・ジョイ氏によるもので、サマープログラムの準備と並行してはやぶさ生と留学生との交流の機会を設ける“Tandem learning”を行うことが検討されていた。Tandem learning については後節で詳しく述べるが、当初は言語学習のパートナーとなることを目的として計画されたものであった。

筆者が担当する日本語コースの教材を作るにあたり、準備段階でサワダ氏から Tandem learning についての提案を受けたことから、はやぶさ生を筆者が作成する留学生向けの教材作成に参加させることによって、彼らに国際的な経験をさせられるのではないかと発想に至った。これは、留学生と日本人学生の共修授業を長年行ってきたサワダ氏から、このような活動を通して両者に国際的な経験をさせることができるということを知っていたことと、近年政府が主導して国内の複数の大学が取り組んでいる「グローバル人材育成」の考え方にも通ずる成果が見込めるのではないかと考えたためである。

はやぶさ生を留学生向け日本語教材作成に参加させることの最も重要な意義は、「留学生のための日本語教材」を作成する過程に参加することを体験することにより、外国人学生はどのように日本語を学んでいるのか、留学生から見たら、弘前大学や日本の若者はどのように見えるのか、といったことを考える機会とすることができることである。サマープログラム用の教材の内容は、「自己紹介」「大学の紹介」「弘前公園の紹介」「趣味」「将来の夢」等大学生に身近な日常の話題を取り上げている。このような生活に身近なトピックを、自らの母語である日本語で話す際、留学生の教材となることを意識して動画に出演することは、客観的に母語と自文化、生活習慣などを振り返る機会となることが考えられる。

これと同時に、留学生にとっても、同年代の若者が出演している教材を使用して日本語を学習することで、日本語や日本の若者を身近に感じることができるという利点もあり、はやぶさ生の参加は、留学生とはやぶさ生の両者に win-win の効果が期待できると考え、本実践に至った。

日本語教材作成への出演

本節では、はやぶさ生がサマープログラムで使用することを目的として作成された教材作成の過程にどのように参加したかを述べる。

「第1課 簡単な自己紹介」

第1課のテーマは「簡単な自己紹介」である。はやぶさ生には、事前に「自己紹介で言う項目」が書かれたフローチャートを見せ（図1）、その項目に従って、自分で自己紹介をスマホで撮影して提出するように指示した。教材で使用したフローチャートは以下である。

図1
サマープログラム Japanese Course Lesson 1 ワークシート p. 6

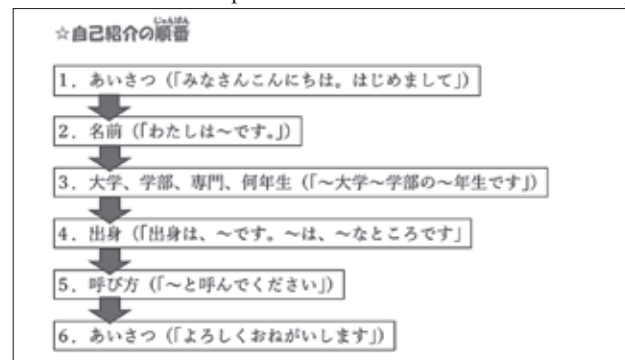


図1の自己紹介は、留学生向け日本語教材では一般的な内容の自己紹介であるが、はやぶさ生には撮影の際、「出身地が日本のどこにあるか」、「出身地の特徴を必ず一言言うこと」という指示を出した。普通母語話者同士の会話であれば、自己紹介の時に「青森県は本州の一番北にあります」などと言うことはないであろう。自分の自己紹介を誰が聞くのか、ということ意識させることを意図したものである。学生たちはこの指示に従い、以下のような自己紹介を撮影して提出した。

図2

はやぶさ生の自己紹介（スクリプト）

みなさんこんにちは。はじめまして。私は、〇〇です。←
 弘前大学、教育学部、小学校コースの、X年生です。←
 出身は、〇〇県です。〇〇県は、▼▼県の南にあります。←
 田んぼがたくさんある、のどかなところですよ。←
 私のことは、☆☆、と呼んでください。よろしくお願いします。←

この自己紹介の教材は、留学生は日本語での自己紹介の方法を学べ、はやぶさ生にとっては、外国人に向けての自己紹介の仕方を学べるという利点がある。

「第2課 大学の紹介」

第2課は弘前大学の紹介である。2課の撮影の際には、筆者が用意した会話文を読んでもらい、必要に応じて自然な表現に直して会話した。以下がその様子と留学生が取り組んだ課題である。

図3

はやぶさ生が弘前大学を紹介する動画の一部



図4

第2課「大学紹介」サマープログラム Japanese Course Lesson2 ワークシート p. 9

3-7
A: これは、なんですか?
B: これは、弘大の⑦_____です。⑧_____と、⑨_____です。
3-8
A: これは、なんですか。
B: これは、⑩_____です。毎日、変わります。
3-9
A: ここでは、何を売っていますか?
B: ここでは、⑪_____と、⑫_____も売っています。
a. おみやげ b. アイスクリーム c. 文房具 d. お弁当 e. リンゴゼリー f. ドリンク g. カップラーメン h. おにぎり i. アップルスナック j. お茶 k. ジュース g. サンドイッチ

第2課では、大学紹介として、正門前、教室、売店、コンビニ、食堂で撮影を行った。本課で扱う日本語は、「これはなんですか?」「これはA(名詞)です」という初級の文を使用したやりとりで、はやぶさ生たちには、用意したスクリプトを覚えてもらい、会話をしてもらった。

本課を撮影する際、出演者の一人が「カップラーメンも売ってあります」と言い、「売っています」と変更して撮り直しになるという場面があった。「売ってあります」というのは、日本語文法の観点から言えば誤用であることから筆者が訂正を指示したのであるが、その際「そうか、「売ってある」って言わないんだ」というような確認を出演者自身がしている様子が見られた。その他にも、通常初級学習者が習う「食べます」「起きます」などの動詞文を導入する場面では、「パンとコーヒーを食べますね(下線筆者「コーヒーを食べます」は意味的に間違い)」、「飲み物です、あれ、ソフトドリンク? ジュース?」、「これ、パソコン? モニター? なんていうの?」など、複数の場面で撮り直し、言い直しを行う様子も見られた。

「第3課 弘前公園の紹介」

第3課では、弘前市公園緑地課の協力を得て、弘前城の桜まつりの開催中に弘前公園で撮影を行った。以下がその様子である。

図5

第3課「岩木山」「弘前城」の紹介動画の一部



図6

サマープログラム Japanese Course Lesson3 ワークシート p. 8

⑤
A: これは、なんですか。
B: これは、a. _____ です。弘前では、リンゴがたくさん取れます。
A: そうですか。おいしそうですね。

⑥
A: これは、なんですか。
B: これは、b. _____ です。c. _____ な箱です。
いろいろな d. _____ があります。
A: そうですか。きれいですね。

⑦
A: これは、なんですか。
B: これは、「e. _____」です。「e.」は、8月に青森県でする「f. _____」です。
「g. _____」といいます。大きな e. をみんなで h. _____。楽しいですよ。
A: 楽しそうですね。ぜひ見てみたいです。
B: ぜひ来てください。

⑧
A: これは、なんですか。
B: これは、津軽塗の i. _____ です。津軽塗は、c. な j. _____ です。
k. _____ がとてもきれいです。

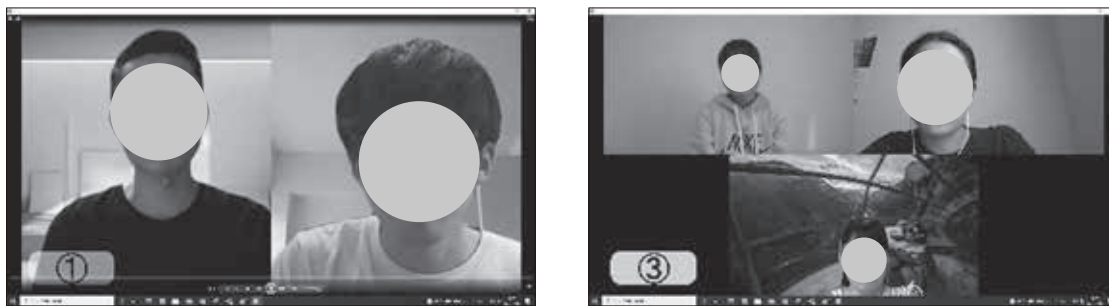
3課の撮影では、最初の場面のみスクリプトを渡し、それを読み上げてもらったが、弘前城内、土産物店と場面を変えて撮影する中で、会話を出演者自身に考えてもらい撮影を行った。第2課の大学紹介の時と同様に、出演者が適切な言葉を探して複数回撮り直しを行ったり、筆者に言葉を確認したりする様子が見られた。特に、「津軽塗」や「こぎん刺し」、「ねぶた」など青森特有の伝統文化について説明する際には、「模様？柄？」「布？刺繍？」「工芸？技術？」など、初級学習者にもわかりやすい言葉は何か、懸命に考えていた。3課でも、はやぶさ生は「外から見た」自国の文化をどう説明するかを意識を働かせる経験をしていたことが伺われた。

第5課 「趣味」

第5課では、2～3人のグループで、「趣味」について友人と語り合う形式のビデオを作成してもらった。以下がその様子である。

図7

第5課「趣味」について語り合うはやぶさ生の様子



第5課では、「趣味は何か、どのぐらいの頻度でやっているか、どこでやっているか、いつから始めたか、どこがおもしろいか」を聞くことと、あいづちとして「へえ～いいね」「おもしろそうだね」、「今度（自分も）やってみようかな」という肯定的な表現を使うよう指示した。

この相槌に関する指示は、はやぶさ生のグローバルリーダーとしての「コミュニケーション能力」育成を意識した指示である。文化背景や考え方が異なる相手とのやりとりにおいて、まず大事なことは「相手を否定しないこと」である。相手の趣味や好きなことについて、「いいね」「おもしろそうだね」という肯定的な相槌でやりとりを続けることによって、話し手はもっと話したいと思うようになり、さらに聞き手も相手について知りたいと思う気持ちが高まる。このようにして、互いのことを認め合い、違いを認識することによって、互いを認めることにつながり、良好な人間関係を作る基盤となると考える。このことは次節で紹介する Tandem Learning においても見られたことであるが、事後アンケートにおいて「相手の国、文化について興味がわいた」「学習目的以上の関係になれ」との感想を書いている学生がいることを見ても、このような効果があったと言えるだろう。

“Tandem learning”による学び

本節では、Tandem learningへの参加によって、はやぶさ生がどんなことを学んだかを検証する。

“Tandem learning”とは

“Tandem learning”という名前の意味については、注8で述べているが、本節でははやぶさ生が作成に参加した日本語教材を用いて授業を行ったコースが含まれる2021年6月～7月に行われたサマープログラムと並行して実施した“Tandem learning”について詳細を述べる。

サマープログラムは、筆者が担当した“Japanese Language Course”の他に、“Contemporary Japanese culture”と“Japanese Cultural History”の2つのコースがあり、これら3つのコースから成るプログラムである。本プログラムの受講生は、本学と交流協定を結ぶ海外提携大学の大学生のうち、日本語を学んでいる初級～中級の学生である。2021年には、アメリカ、カナダ、タイ、中国、韓国、チリ、ロシアから24名の参加があり、上記の3つのコースが二か月間に渡って行われた。これと同時進行で、本サマープログラム受講生とはやぶさ生との“Tandem learning”を行った。

Tandem learningでは、はやぶさ生1名に対して多国籍のサマープログラム受講生2～3名を割り当て、二週間に一度のペースで1対1、もしくは1対複数の組み合わせで30分程度のミーティングをオンラインで行うよう指示した。ミーティング実施後、レポートとして、はやぶさ生は英語で、サマープログラム受講生は日本語で、ミーティング中何を話したかをまとめて書くことを課題とし、各言語による報告書を提出させた。

サマープログラム中、海外の受講生には最低でも4回のミーティングの機会を持つことを必須の課題とし、4つのトピックについて話し合うよう指示した。以下が、ミーティングのトピックである。

表1
Tandem learning 4つのトピック (サワダ・ハンナ・ジョイ氏作)

第1回	Get to know each other
第2回	Find out about student life in your country
第3回	Issues of concern
第4回	Your own topic

Tandem Learningと留学生の日本語学習支援において、はやぶさ生は、留学生の日本語の課題を手伝い、また、相手に英語でインタビューをした。はやぶさカレッジの修了要件であるTOEFL ITP500点以上に到達するため、英語力の高い留学生と英語の学習をすることもこのTandem learningの目的ではあるが、留学生側からの質問には、易しい日本語で答えるよう指示している。はやぶさ生はこのTandem learningの中で、英語、日本語といった特定の言語を使用することにこだわらず、相手と協力して課題に取り組んでいたとみられ、事後アンケートでその様子が記述されていた。次節で事後アンケートについて詳しく述べる。

事後アンケート

アンケートの結果

本節では、はやぶさ生に行った事後アンケートの結果について述べる。はやぶさ8期生は7名で、アンケートに回答した学生は6名である。統計にかけられる母数には達していないため、アンケートの結果をそのまま記述する。アンケートの質問は主に、教材動画出演の感想と、Tandem Learningの感想の2部門に分かれており、最後に総合的に何を学んだかという問いを設けた。以下に学生が書いた文をそのまま記述し考察の材料とする。

日本語教材としての動画出演について

日本語教材動画に出演した感想としては以下のようなものがあった。

- 「自分が動画に映るのが少し恥ずかしい気持ちもあった。しかし、普段は日本語を、教育のためにゆっくりわかりやすく話す、という機会がなかったので、自分の日本語を見直す良い機会になったし、それは少し不思議な感じでもあった」(下線筆者、以下同様)

- 「普段日本語を話すときには正しい文法や発音を意識したことがなかったが、改めて日本語に向き合ってみると、助詞1つを変えるだけで文脈の意味が変わったり、普段正しい文法を使えてなかったりしたことに気づきました」

これらのコメントから、はやぶさ生が普段意識せずに使用している日本語について、動画出演によって改めて考える機会になっていたことが伺える。

Tandem learningについて

Tandem learning については以下のような感想があった。

- 「私は3つの国の大学生とタンデムラーニングを行ったが、国によって大学生の関心をひいている事柄や話題などがそれぞれ違っており、それは面白いと思った。また、相手の学生生活の様子やコロナ社会の実態なども知れたこともよかったし、どのタンデムパートナーも、日本や日本人について良い印象を持っていることにも驚いた。(例えば、日本料理やアニメ・漫画が好印象だったり(原文ママ)、日本人は誠実で優しい、などの意見が多かった。)」
- さまざまな考え方や日常生活についてのことを知ることが出来たので自分の考えが広がりました。
- 英語を通じて海を超えた人々と話すことに喜びを感動を覚えました(原文ママ)。チリに住んでいるパートナーと話すときは時差が10時間以上あることや、季節が日本と反対であることが非常に面白いなと思いました。タンデムが終わった後も連絡を取り合うパートナーもできて、参加して良かったなと思いました。

以上の三つの意見を見ると、異なる文化背景を持つパートナーと話をすることによって、自文化とは異なる文化について知ると同時に、日本について、外から見た印象と自分が思っているのは違うということ学んでいる様子も見られた。このような点は、加賀美(1999)が「国際共修による効果」として挙げている「異文化理解の深化のみならず、視野の拡大、自己成長への認識促進および肯定的な態度変容」につながるものと考えられ、本取り組みを通してはやぶさ生は、「国際共修科目」を体験した学生と同様の学習効果を得たと考えられる。

全体を通して何を学んだか

全体を通してどのような感想を持ったか、参加前と参加後に何か変化はあったか、との問いには以下のような回答があった。

- タンデムラーニングを通して、(中略)例えば、中国やタイの料理、歴史などに少し興味を持ち、それを調べてみる機会が増えたことは小さな変化だと思うし、実際に中国の学生と中国語で会話できた経験によって、今は中国語を学ぶのが楽しいと思えているのも、このプログラムを通じた小さな変化だと思う。
- どの方も、わたしの拙い英語での話をじっくりと聞いてくれたように感じました。最初にもっていた恥じらいはほぼ無くなり、失敗を恐れずに話すことの大切さを、こうやって実際に話すことで、やっと身に染みて分かったと感じています。

以上のように、何度も対話を繰り返すうち、最初にあった恥ずかしさを乗り越え、他言語を使用して相手と気持ちが通じることの喜びを感じ、他国の文化や習慣に興味を持ったということを書いた学生がほとんどだった(6名中5名にこのような記述があった)。これは、はやぶさカレッジの人材育成目標にかなった学生の変化であると言うことができ、はやぶさ生の中で、グローバルリーダーシップに必要な素養である「他言語・多文化を受容する寛容さ」や「世界的な視野の獲得」につながる学習が起っていたことがうかがわれる結果となった。

アンケート結果からわかること

以上、アンケート結果のそれぞれの項目のはやぶさ生の回答について検証してきた。アンケート結果から伺えることは、1. 日本語教材作成への参加から、自分の母語である日本語について、それを外国語として学ぶ外国人学生の視点に立って振り返る機会を得たこと、2. タンデムラーニングでは、学習言語の練習相手としてだけでなく、同年代の若者として、趣味や将来の夢などについて語りあうことにより、個人的な交流が発生し、良好な人間関係を築くことができたということが言えるであろう。このような点は、はやぶさ生が社会に出ていくにあたり、「国際人」として世界で活躍する人材になるための貴重な素養を、本実践を通して涵養することができたことを示唆していると考えられる。

結論と今後の課題

以上、サマープログラムにおけるはやぶさ生たちの学びを検証してきた。彼らは本取り組みを通して、「異文化交流に対する意欲、柔軟性、感情の自己管理、異文化の許容力の向上、自文化理解の促進」(末松2017)等、グローバルリーダーシップ育成につながる学びを得たのではないかと考える。

コロナ禍により中止となった留学の代替として、オンラインプログラムを行っている大学は多いが、本稿のように、グローバルリーダーシップの研鑽を目的に日本人学生を留学生向けのプログラムに参加させるという試みは、管見の限りではあまり見られない。本学独自の取り組みとして、今後もこのような試みを展開していきたいと考える。

引用文献

- 足立祐子, 池田英喜. (2017). 「協働学習における授業改善の経緯と教師の役割—共修授業「グローバルコミュニケーション」「日本事情グローバル」の授業実践報告から—」『新潟大学高等教育研究』5, pp.17-22.
- 岩崎千晶, 池田佳子. (2015). 「グローバル人材の育成を見据えた日本人学生と外国人学生の混在型による初年次交流学習のデザイン」『関西大学高等教育研究』6, pp.87-93.
- 加賀美登美代. (1999). 「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」『コミュニティ心理学研究』2(2), pp.131-142.
- 小林裕美 (2014) 「SGUに代表される我が国の高等教育機関に関するグローバル戦略について～政策動向を振り返る～」発表レジメ「大学のグローバル化のための取り組みと指標に関する勉強会」2014年12月4日於：徳島大学 pp.5-14.
- 黒田千晴, リチャードハリソン. (2021). 「プロジェクト学習型国際共修授業における教育実践—学習者間の学びを促す仕組みについて—」『神戸大学留学生教育研究』5, pp.45-68.
- 佐藤勢紀子, 他. (2011). 「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設—留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』6, pp.143-156.
- 末松和子. (2017). 「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3, pp.41-51.
- 末松和子. (2020). 「正課外国際交流活動における国際共修—成果に比した活動の特徴と学生の学びに着目して—」『留学生教育』pp.9-19, 留学生教育学会